

あの日さえなければ

南城市立佐敷中学校三年 山城 璃々杏

毎朝通う学校

教室から聞こえる小鳥の囀り

部活生で賑わう体育館のうだるような暑さ

たまに行くショッピングモール

洋服を楽しそうに選ぶ親子の笑い声

食欲をそそる香ばしい焼き立てパンの香り

ほっとできる温かな家

今日の出来事を次から次へと話す妹の声

スマホ片手に友達との何気ない会話

あたり前に過ぎる日々が

また今日も過ぎていく

八十年前のあの日

あたり前だった日々が

あたり前じゃなくなった

八十年前のあの日

毎日一緒だった家族が

涙を流しバラバラになった

八十年前のあの日

いつも通っていた学校が

瓦礫と血色の枯れ草になった

あの日曾祖父は

今の私と同じ中学生

望んでいない争いに行った

望んでいない戦いに行った

「怖い…」

「死にたくない…」

「家族に会いたい…」

多くの想いを胸に

激戦地を走り回った

子供を抱き泣き叫ぶ母親の傍を

全力で 無心で通り過ぎた

やせ細った足で逃げるおばあの横を

助けたい感情を忘れ 横目にした

何とも言えない苦しい臭いの中呼吸して

戦い抜いた 武器を手にして

八十年前のあの日が

曾祖父の足を奪った

曾祖父のあたり前を奪った

曾祖父の中学時代を奪った

あの日がなければ

あの日さえなければ：

片足のない曾祖父に逢う

久しぶりに逢う

曾祖父は笑顔で私を見る

その笑顔は温か

その声は穏やか

あたり前が戻ってきた

あたり前が曾祖父の笑顔を守っていた

あたり前を大事にしたい

私たちの手で

温かな笑顔を

穏やかな声を

抱きしめながら守っていききたい

私はあの日を体験していない

けど

曾祖父から

あの日を学んだ

平和の笑顔を学んだ

私一人では守れない

だから

爽やかな清々しい風とともに

煌く目をした友とともに

必ず守り抜く

緑豊かなうちなーを

笑い声に包まれた蒼い日常を

家族を眺める曾祖父の優しい眼差しを